入選

一歩前に

愛知県　沢上中学校　二年
飯田　虎徹

行動に移すこと、それは自らの意思で動くということ。その行動は、誰かに喜びを与え良い人間関係を築くことにつながる一方、誰かを不快にさせることもある。そのどちらも選択できる行動というものは、本来人を笑顔にするためにある。周りの人だけではなく、自分自身の心も清らかにすることができるものだ、と僕は考える。

思い出されるのは、学校で行われた福祉体験でのできごと。車いす体験や視覚障がい者の歩行体験などを通して、僕が経験したことのない不自由を抱えて生きている人のことを改めて知った。歩行体験で目にアイマスクをつけている友達を誘導しながら、僕はこのような視覚障がい者の人々を少しでも助けられられることはできないのか、とずっと考えていた。すべての体験を終えた後も、そのことが頭から離れなかった。最後に、講師として来ていた視覚障がい者の方が、

「私はいつもこの学校の前を、気持ちよく通ることができます。なぜなら、あなたたちの先輩がいつも、点字ブロックの上にとめられている自転車を道の脇に寄せておいてくれるからです。」

と言った。このとき僕は、はっとなった。自分も先輩たちのようになりたいと思うと同時に、思っていても伝わらないから、行動に移してみよう、と思った。　深く考えすぎていた自分だったが、目からうろこが落ちたように感じられた。

翌週、強い日差しを受けながら下校していると、一人のおばあさんが困ったように辺りを見渡していた。周りの人たちは、おばあさんに気づかないのか、その横を通り過ぎて行った。暑い日だったが、急に心に寒さを感じた。困っていそうな人がいるのに、その前を通り過ぎるなんて、と。

そのとき、視覚障がい者の方の話とその場で感じた自分の気持ちを思い出した。

「行動に移そう」

そう思い、いっしょに下校していた友達に別れを告げると、勇気を振り絞り、おばあさんに「何かお困りですか？」と、声をかけてみた。もしも困っていなかったら迷惑だろうか、という不安が頭をよぎった。だが、おばあさんは僕にほほえんでくれた。

「ありがとうね。実は地下鉄の駅を探していたのだけれど、どこにあるのかわからなくて。」

僕はおばあさんに、

「いっしょにその駅まで行きましょう。」と言って、地下鉄の駅まで送った。

家とは反対方向の駅だったが、そんなこともこの暑さのことも吹き飛ぶぐらい、心は喜びと達成感であふれていた。心も洗われた気がする。何より「ありがとうね。」のひとことが嬉しかった。

僕がおばあさんを助けたいと思っていても、行動しなければ伝わらない。自分の意思で一歩前に出てみなければ、見えない明るい世界があることを学んだ。

誰かのために一歩を踏み出し、その人に歩み寄ることが当たり前だということを、心に刻み込んで生きていける人になりたい。